深夜12時過ぎの六本木ヒルズ。最上階にほど近い43階から48階までを占めるのが、ゴールドマン・サックスグループのオフィスである。

誰よりも働き、誰よりも儲けるヒルズの殿上人

最強外資「ゴールドマン・サックス」で働く！

第一四半期で純利益24億7900万ドル(約2925億円)というウォール街の最高記録を更新した投資銀行がある。その名はゴールドマン・サックス。新卒でも7～800万円とされる年棒は、トップでは数十億円にも及ぶという。だがそれと引き換えに深夜だろうが、海外だろうが仕事に追われる日々。現代のエリートたちの職場とは？

取材・文／三平三郎

全社員に届いたボイスメール

昨年12月15日の決算発表当日、六本木ヒルズにあるゴールドマン・サックス(GS)証券東京支店で働く全社員あてに、一通のボイスメールが一斉に送られた。発信者は、ニューヨーク本社にいる会長&最高経営責任者ヘンリー・ポールソン。

「エブリワン。ディス イズ ヘンリー・ポールソン――」

そんな言葉で始まる内容は、決算において過去最高となる純利益62億9000万ドル(約7422億円)を記録したことと、それに尽力した全社員への努力を感謝する内容であった。メールの宛先は、東京支店の1200人だけではない。世界の主要44都市に広がる支店および関連会社に在籍する全スタッフ2万人に宛てられていた。

その3ヵ月後の今年3月15日、ゴールドマン・サックスは再び世間を驚かせた。06年度第1四半期の純利益として、ウォール街(NY証券取引所)の史上過去最高となる純利益24億7900万ドル(約2925億円・前年比62%増)を計上。この結果は、ロイターによれば、米国株式市場を全体を押し上げたという。

「最強外資」と呼ばれるゴールドマン・サックスの面目躍如の瞬間だった。

だがゴールドマン・サックスの強さはこんなものではない、すごいのはその人材輩出力だ。クリントン政権の財務長官ロバート・ルービンやブッシュ政権の財務長官ステフェン・フリードマン、現NY証券取引所CEOのジョン・セインなどを輩出してきた。先のヘンリー・ポールソンも次期財務長官と噂されている。日本においても、例えば外資系金融機関の日本法人トップにはGS出身者がずらりと並ぶ。JPモルガン証券の河野哲也社長やリーマン・ブラザーズ証券の桂木明夫代表、メリルリンチ日本証券の川島健資副会長などそうそうたる顔ぶれである。

一般消費者向けではなく、法人相手の投資銀行ゆえ、日本ではまだ一般的には認知度が低いが、知る人は知っている、それが